

常設展に新しい昆虫の展示ができました

わたなべ きょうへい
渡辺 恭平(学芸員)

はじめに

2026年2月に、当館の常設展に新しい昆虫の展示が加わりました(図1,2)。この展示は多くの皆様からご寄附いただいたお金を活用したものです。まずはご寄附、ご支援いただいたすべての方々に、お礼を申し上げます。今回は、展示の紹介に加え、準備の裏話(主に苦労話)を書かせていただきます。

新しい展示の内容

今回新たに加わった展示は、大半が日本の昆虫で、神奈川県を含む日本各地で採集された標本が主役です。当館の1階生命展示室にある「昆虫の世界」の標本は当館を代表する昆虫展示ですが、この標本は多くが海外産の昆虫で、日本産の昆虫は少数しかない、という課題がありました。今回増えた展示は、その欠けている日本の昆虫を大幅に増やしたものです。これで名実ともに「世界」の昆虫を見られるようになりました。

展示は従来の縦型の標本箱配置ではなく、テーブル型の展示台に並べ、上から覗き込む形としました。小さいものも多い日本の昆虫を間近で見ることができ、上のフレームから照明を照射することで、標本箱内にできる「影」を減らすこともできました。標本の劣化対策として、ケースの表面は紫外線を遮断する強化アクリルで覆っています。

追加した昆虫標本は9箱で、うち6箱が分類群(チョウやハチといった仲間)を「実物昆虫図鑑」形式で並べたもの、残りの3箱が「害虫と益虫」「外来種と地球温暖化で増えている昆虫」「希少な昆虫」というテーマごとに並べたものです。限られた予算でなるべく多くの昆虫を展示するため、なるべく多くの箱を展示できるように工夫しました。

昆虫の展示準備はたいへん

昆虫の展示は、実は結構たいへんです。標本が脆い上、虫害やカビ害、紫外線による退色等を防ぐため、通常はきちんとした標本箱に入れて展示する必要(制約)があります。これにより、見せ方の



図1. 「実物昆虫図鑑」で並べた新しい昆虫展示6箱. 図2の3箱もあわせ、ルーペは現在取り外している。

自由度が下がります。また、一つひとつが小さく、おまけに種数が多いために、並べる作業はそれらのラベルの準備とあわせ、膨大な作業を要します。大きな石や骨を一つ置くだけで、ある程度のスペースが埋まる分野を見ていると、本当に羨ましく思います(その分野の苦労はあるでしょうが…)。

展示業者の方々と展示台の設計を終え、展示できる箱数が決まったら、期日までに展示を完成させます。収蔵庫から標本を出してきて並べますが、狭隘化した収蔵庫では、資料を探し出すのも一苦労です。収蔵棚が溢れている上に、作業スペースすら物に占拠されている始末です。結局、会議室まで標本箱を運び、必要な標本を抜き出す作業を重ねました。もちろん、会議等が無いタイミングを見ての実施です。ボランティアの支援もあり何とか終わることができましたが、

やはりバックヤードの狭隘化問題は作業効率を著しく下げており、解決が必要です。

標本を並べる際には、昆虫の形や大きさ、色合いや分類群、生態のバランスを見て配置します。また、種名ラベルが標本に隠れないようにする必要もあります。展示する標本を選んだあとは、その配置をあれこれ悩みながら進めます。どうしてもあと1種増やしたい場合等、ミリ単位で標本を動かしたり、展示する虫をより小さな種に入れ替えることもあります。近くから覗き込む展示台により、種名ラベルを小さくできた点は、多くの標本を並べる上で大いに助けとなりました。

標本が並び、種名ラベルも配置できたら、希少種の産地情報を伏せる作業があります。標本の針にはその虫の採集データを書いたラベルがついていますが、希少種の場合、この情報が乱獲等に



図2. テーマごとに並べた新しい昆虫展示3箱.

悪用される恐れがあります。そのため、希少種のラベルと、希少種と同じ産地で採れた標本のラベルは、全て裏返しにする作業をします。数が数だけに、結構たいへんですが、必ずすべき作業です。

終わらない解説の準備

当館の常設展示の解説は、全般的に比較的少なめです。解説が多いと読む方も疲れるので、まずは感じたり、楽しんだり、興味を養ってもらえれば良いという考えからです。新しい展示にも、その考えを踏まえてあまり解説を加えていません。一方で解説を読みたいという方がいるのも事実です。そこで、ウェブサイトに解説を掲載することにしました。最近

は図鑑をはじめ良い普及書も多く、インターネットで種名を検索すればかなりの情報を得ることができるため、解説はコラム調を主とし、多少マニア目線の砕けた内容としてみました。

私は比較的文を書くのが好きで、多少の解説であればすぐに書き終わるのですが、今回の展示解説を書いていると、いつまでたっても書き終わりません。それもそのはず、後でカウントしたところ、寄附受付時の目標である標本640個体(64は虫好きのラッキーナンバー)を遥かに上回る、723種1,262個体もの昆虫が展示に加わっていたのです。当初予定の倍くらいの時間を要して、なんとか解説を書き上げたときには、ホッとしました。



図3. チョウの標本を追加する様子.

既にある展示も少し更新

せっかくの機会ですので、生命展示室に既にある海外産標本の展示にも手を加えました。今回の展示追加の一つの目的に、狭隘化が限界を迎えている収蔵庫にある標本を少しでも展示室に出し、収蔵庫に空きスペースを生み出すことがあります。そのため、乱舞するチョウの展示に、大幅に標本を追加する作業を、ボランティアの協力を得て行いました(図3)。箱を壁から外し、裏に積もった大量のホコリを掃除機で吸い、重いフタを開け、バランスを見ながら標本を並べるのはたいへんな作業でしたが、チョウの数は約300個体ほど増え、収蔵庫の標本棚が2段空きました。

さらに、ささやかですが、いくつかの標本を追加しました。有名な素数ゼミであるジュウシチネンゼミ、ジャガイモの大害虫コロラドハムシ、ヘルマン・ヘッセ著の「少年の日の思い出」で有名なクジャヤママユの仲間2種、背中に人面模様があり、キイキイと音を立てることからも不吉の象徴とされるヨーロッパメンガタズメの計5種です。どこに追加してあるか、探してみてください。

おわりに…展示がお披露目されてからもたいへん

特別展や企画展は、展示が完成後、オープンする前に、様々な確認作業が行えます。常設展の更新の場合、大規模なものであれば休館を伴って時間を確保できますが、今回の部分改修では、展示台の設置後、すぐにお客さんにお披露目されることになりました。今回の展示では、拡大して観察できるルーペを展示台につけていましたが、その一部が持ち去られてしまったこと等、少々のトラブルがありました。オープン後しばらくは担当として気をもむ日々が続きました。

この号が皆様のお目に留まるころには、きっと新しい展示も常設展の一部として、すっかりなじんでいると思います。まだご覧になっていない方は、ぜひ当館にお越しください。今後も、一つひとつ改良を重ね、皆さんに楽しんでいただける展示に育てていければと思いますので、引き続きよろしく願いいたします。